

中世小歌の研究 : 漢詩・漢語との関連性の視点から

著者	謝 林
ファイル(説明)	博士論文要約 博士論文要旨 最終試験結果の要旨 論文審査の要旨
学位授与番号	17701甲人社研第48号
URL	http://hdl.handle.net/10232/00032127

令和4年8月22日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

学位(博士)論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 謝 林

学位論文題目

中世小歌の研究—漢詩・漢語との関連性の視点から—

(Medieval Kouta songs—the relevance of classical Chinese poetry and Chinese—)

論文審査の概要

1. 本論文の目的

本論文は日本の中世を代表する小歌集『閑吟集』(永正十五年(1518)成立)および『宗安小歌集』(16世紀末成立)の所収歌および序文を対象として、編纂者および作者が当時の教養人(貴族や僧侶など)であることを前提として、漢詩の語句が小歌にどのように取り込まれ、語のイメージが歌にどのように反映しているのかを詳細かつ具体的に分析する。従来の研究では、漢詩の句レベルにとどまっていた影響関係を、語レベルで考察することによって、和漢折衷で創作された小歌の存在を指摘し、小歌の解釈の幅を広げ、新たな解釈の可能性を提示するなど、当該分野における研究の新生面を切り開くことを目指している。

2. 本論文の構成

本論文は、全7章からなり、小歌の概念や研究史をまとめるとともに研究の視点を表明した序章から始まり、第一章から第三章においては『閑吟集』所収の小歌を対象に、また第四章・第五章では『宗安小歌集』所収の小歌を対象に、小歌の漢詩や漢語の受容を中心に論を展開し、終章で本論の結論を述べている。

まず、序章では、歌謡というジャンルにおける小歌の概念、歴史、代表歌集について紹介したあと、漢詩との関係に論及した先行研究をまとめ、上記のように漢詩の句単位から語の単位へと研究の視点を移すことによって、小歌と漢詩・漢語の影響関係を明らかにするという本論文の立場を表明する。

第一章は、『閑吟集』二六番歌「上林に鳥がすむやらう、花がちり候、いささらは、な

るをかけて、花のとりおはう」を論じる。これは「上林」「鳥」「鳴子」などの要素から構成されている小歌であるが、この小歌に使用された「上林」という語は、写本において「しやうりん」「うへのはやし」と二つの読み仮名が付されている特殊な語彙である。申請者はこの点に着目して、本来「上林」は「天子の御苑」である「上林苑」を指す言葉で、漢詩の世界では「鳥」などの詩語と組み合わせての使用が定例化していること、一方、日本の中世資料や禅林文学においても「上林」を「天子の御苑」として把握している実態が確認できることから、二六番歌は御苑の花を散らす鳥を追うために「護花鈴」ならぬ「鳴子」をかけるという趣向として詠んだものであり、和漢の素材を巧みに組み合わせて詠じた小歌であることを明らかにした。さらに、この「上林」が狂言歌謡として利用されるようになると、季節が春から秋に変化したこととも相俟って、「上林」という言葉は「上の林」「上の山」に変化していき、本来の意味が忘れられていったことをも明らかにしている。

第二章は、「せいしやう」という語が詠み込まれている『閑吟集』二八一番歌「つほひなう、せいしやう、つほひなふ、つほや、ねもせひて、ねむかるらふ」について論じる。このひらがな書きの「せいしやう」という語は従来種々解釈されてきたが、植物の「合歓」の異称「青裳」として理解されるのが通例であった。申請者は諸文献を博搜した結果、中国の本草書や類書においては「青堂」「青裳」「青囊」と表記されることが多く、「青裳」は誤写、誤伝で、この形が日本に移入されたことを指摘する。すなわち、二八一番歌は、この新しく日本に渡来した「青裳」という語を当時の教養人たちが取り入れた結果であるとした。また「合歓」についての当時の漢詩における共通のイメージを考察した結果、「恋人を待ち続ける深閨の女性」のイメージがあることを指摘し、「つばい」という俗語を組み合わせることで新鮮味が演出されたとする。

第三章は、「白菊」を読み込んだ二首の『閑吟集』所収歌（二〇四番「霜の白菊、うつるひやすやなふ、しやたのむましの一花こゝろや」・二〇五番歌「菊のしらきくは、なんてもなやなふ」）を対象に考察したものである。申請者は「白菊」を主題とした和歌・漢詩・謡曲など芸文作品を博搜し、「白菊」は美少年と白髪の人という両面を象徴することを示す。中世においては男色がさかんに行われており、二〇四番歌は美少年のイメージを花に託している可能性を指摘、さらに、漢詩における菊は陶淵明と密接な関係があることから、二〇五番歌の「霜の白菊」には隠逸の老人が象徴されており、この小歌は人生に対する感慨を詠じたものであるとする。

第四章は、「しんご」という語が使用された『宗安小歌集』三八番歌「月をふんてはよのつねそろよ、風雨の来こそしんごよ」を論じる。この「しんご」という語については、『宗安小歌集』発見者の笹野聖が「尽期」の漢字を当て、「未来永劫、永久」「二世を契った」「永遠」の意として解釈が行われて以来この解釈が継承されてきた。しかしながら、「尽期（じんご）」は、『日葡辞書』等によれば「結末、終わり」を意味する語であり、「尽期」では矛盾が生じることに気付いた申請者は新たに「真箇」（「本当の」「まことの」の意）を当てるべきことを主張する。当該歌には「月をふんては」「風雨の来」と対の表現があるが、漢詩との強い関連性を重視して、同音の漢語表現を洗い出し、『日本風土記』の漢訳の歌謡の表現などを根拠として、当該歌は恋人の訪れを待つ人物（女性）を描く日本の伝統的な恋愛の場面を描きながら、「真箇」という新しい漢語表現を導入したところに当該歌の新味があることを見出した。

第五章は、『宗安小歌集』の小歌に見られる阮籍（竹林の七賢人のひとり）の影響を考察する。阮籍には「詠懐詩」という八二首からなる長編詩があり、『文選』にも詩が入集している。『宗安小歌集』一八二番歌をはじめ、同集所収の小歌には、阮籍の漢詩と多くの共通点を有する部分があることを指摘するとともに、序文に阮籍の『楽論』の音楽思想と共通する性格があることから、阮籍の影響が色濃く反映していることを主張した。

終章は、一章から五章までの考察をまとめ、中世の小歌がいかに漢詩・漢語と関係性をもっているのか、漢詩がいかに小歌化されたのかという問いに対する答えを出したものである。第一に小歌は従来指摘されてきたように漢詩の句レベルで漢詩を撰取しただけでな

く、語レベルで取り入れ、漢詩のイメージを彷彿とさせるものも存在すること、第二に、小歌は「物」のイメージをうまく利用し、象徴的に漢詩のイメージを表現していること、第三に、小歌は和と漢の要素をうまく融合させながら、伝統的な枠に捉われない大胆な発想や新しみをを見せていることを指摘する。中世は戦乱が絶えない社会変動期であり、貴族が独占していた文学や知識は次第に民間に流入していったが、こうした中で、小歌は漢詩のすぐれた象徴的な部分を取り込み、漢語と和語を共演させた作品を成立させ、新しい文学の様式を世に送り出したと結んでいる。

3. 本論文の評価

1) 評価されるべき点

戦前から戦後にかけて小歌の研究は、志田延義・浅野建二・吾郷寅之進ら日本人の研究者によって推し進められてきた。漢詩の影響については、吾郷寅之進がその利用度によって三つの分類の型を提示し、各注釈書においても典拠として漢詩の指摘がなされてきた。これに対し、申請者は、従来の研究のように漢詩の句の類似によって影響関係を測る方法では影響関係が十分測れないとし、語句のイメージが小歌に影響を与えていることを想定し、漢語のイメージや語の組み合わせなど中国の漢詩や同時代の禅林文学などの利用実態にまで掘り下げ検討することを試みた。直接的な語句の対応がなくとも、語に蓄積されたイメージを中国・日本の詩人の作品から抽出、小歌への影響を考察し、解釈をし直すという新しい手法によって、いままで誤解されたり、時代の変化とともに元の意味が忘れられてしまったりした小歌の本来の意味を浮き彫りにしたことは、この分野の研究を一步も二歩も前に進めたことは明らかである。特に「上林」という漢語の解釈をめぐる第一章、「しんこ」を従来の解釈の「尽期」から「真箇」へと転換させた第四章はその著しい成果といえる。

また、『宗安小歌集』の序文にその名がみえる竹林の七賢人で知られる阮籍の詩の影響が小歌に影響を与えていることを指摘した点も、従来の研究の欠を補うものとして評価に値する。

2) 問題点

第一章、第四章のように、投稿論文を基礎にした章は文章もよく練られており、論旨も明確であるのに対し、第二章、第三章ではやや用例の提示に偏って、議論が十分に尽くされないまま結論を急いでいる部分があることは否めない。第二章における「せいしやう」をめぐる議論では、対応する漢語が誤写などによって「青裳」という形になり、新しく日本に渡ってきた言葉であることを指摘しているが、どのような形で、いつごろ渡ってきたのか、その背景について明確にできていない憾みがある。

第三章の白菊を男色の象徴として見るという解釈についても当時の歴史的文化的な意味についての議論が十分でなく、やや説得力を欠くものになっている。

現在確認できる文献が必ずしも当時の知識人が参照した文献とは限らないため、詩文や本草の知識の入手経路に配慮した記述を行うことが必要であった。

4. 総合評価

中世歌謡の研究は長い歴史をもち、志田延義・浅野建二・吾郷寅之進をはじめ、斯界の大家が本文校訂、解釈、漢文学との影響関係など多くの業績を積み重ねてきた。しかしながら中世文学全体からすると研究者の数は多くはないために先学の研究が無批判に継承されてきた面があったことは否めない。

本論文は、上記のような若干の問題点が存在するものの、中世小歌の研究の多くの蓄積があるなかで、詩文における漢語の利用の実態を中国および日本の作品を対象に博搜し、新たな側面から光を当て歌謡における和漢融合の様相を実証的に明らかに得ている。また、従来序文にその名前がありながら十分検討されていなかった阮籍の影響を具体的に指摘したことも意義があり、本論文が当該分野の研究に大いに刺激を与えるものとなっている。

る。今後、五山文学などの中世文学および文化の研究が深化するにつれて、申請者の研究のさらなる進展が期待されるものと評価し、審査委員は全員一致して、博士(学術)の学位を授与するに値する内容を有する研究であると認定した。

授与する博士学位 学術

論文審査結果 合

審査委員

主査 丹羽 謙治

副査 竹岡 健一

副査 竹内 勝徳

副査 高津 孝

副査 堀川 貴司